【第 42 回日本大学理工学部図書館公開講座 概要】

「カンダ・オチャノミズ」を探る

2025 年 6 月 13 日に開催された第 42 回日本大学理工学部図書館公開講座では，建築学科教授であり都市計画および都市デザインの専門家である宇於﨑勝也氏によって，『「カンダ・オチャノミズ」を探る』と題した講演が行われた。本講演は，都市計画と地域史を融合させながら，東京・千代田区神田およびお茶の水エリアの歴史的成り立ちや都市構造の変遷を多角的に解説する内容であった。

冒頭では，宇於﨑氏がこれまでに務めてきた都市計画に関する実績や公職での役割が紹介され，講師としての社会的な背景が明確にされた。氏は板橋区，町田市，船橋市，市川市，川口市などの都市計画審議会委員として活動しており，地域社会への深い関与がうかがえた。

講演の第一部では，「ちよだ」の成り立ちに焦点が当てられた。江戸時代における朱引・墨引の線引きを手がかりに，町奉行による支配体制と現在の東京都区制度の起源について説明がなされた。江戸の範囲を四里四方（約 16km）と定めた朱引に対し，墨引内は町奉行の実際の支配領域であり，現在の東京都の中核を成す地域の原型をなしているとされた。さらに明治以降の東京府・東京市への変遷をたどり，1932（昭和７）年の大東京市成立，そして 1947（昭和 22）年の特別区制度への再編成など，現在の東京都の成り立ちが時系列的に解説された。

続いて千代田区の現状分析が行われ，面積 11.66km²のうち 44%が公共用地で占められていること，昼夜間人口の大きな差異，地区ごとの特性（官庁街，オフィス街，住宅街，学生街，電気街など）が紹介された。特に，千代田区都市計画マスタープランにおける地域別のまちづくり方針に言及され，地域の多様な機能と文化の共存が浮き彫りとなった。

講演の核心部分では，「カンダ・オチャノミズ」を探る視点から，地名の由来，地域の変遷，そして御茶ノ水駅周辺の都市構造について詳述された。「御茶ノ水」という名称は，江戸初期に神田川沿いにあった高林寺の湧水を徳川家康が茶の湯に用いたことに由来するとされ，明治以降もその名が施設名や駅名に継承されてきた。一方で，「オチャノミズ」の表記は駅名以外にはほとんど見られず，明確な地名としての範囲を持たない曖昧な存在であることが指摘された。資料や古地図を用いた比較では，オチャノミズの地域概念が時代とともに移ろい，現代の都市構造の中で流動的な輪郭を持つことが明らかにされた。

また，御茶ノ水駅の歴史にも触れられた。初代の御茶ノ水駅は 1904（明治 37）年に開業し，その後関東大震災の被災や鉄道整備に伴って位置や構造が変更され，現在の駅は 1932（昭和７）年に再建されたものである。狭いホーム設計の理由や設計の背景など，交通インフラの歴史的背景が丁寧に語られた。

さらに，江戸から明治，大正，現代に至るまでの神田川周辺の都市の変化が，航空写真や古地図を交えながら視覚的に紹介された。江戸時代には「小赤壁」「茗渓」と呼ばれた神田川の渓谷が名所とされ，明治期には学問・文化の中心地としての地位を確立した。こうした地域の象徴として，神田明神，湯島聖堂，ニコライ堂などが挙げられ，地域の精神的・文化的中核を成す存在として紹介された。

講演の終盤では，徳川幕府による江戸の都市計画の原点についても触れられた。家康は江戸入府後，飲料水確保のため神田上水の整備を進め，さらに道三堀や小名木川の開削によって舟運の利便性を高めるなど，インフラ整備に注力したことが強調された。こうした都市基盤の整備が以降の江戸の発展を支える要因となり，現代の都市構造にも影響を与えている。

今回の講演は，カンダ・オチャノミズという地域の変遷やトピックを通じて，日本の首都東京がどのように成り立ち，発展してきたのかを理解するための貴重な機会となった。都市計画の観点から，歴史と空間の重層性を読み解く手法は，今後の地域づくりやまちづくりに対しても示唆を与えるものであり，多くの聴講者にとって新たな発見と学びをもたらすものとなった。